私の投稿句の背景（令和七年九月例会）

（投稿句）　入道雲海の底から仁王立ち

坂の街雲の峰より来る市電（2013.6）　逆上がり出来て少年雲の峰（2013.7）
素潜りの一気に浮かび雲の峰（2014.7）荷の解けて顎拭く歩荷雲の峰（2017.7）
雲の峰螺旋階段周るたび（2020.8）　阿形となり吽形となり雲の峰（2021.8）
入道雲海の底から仁王立ち（2025.9）

白い胸

北　洋一

私はその春に高校に入学したばかりの汽車通学の一年生であった。面積だけはやけに広い地方都市の玄関口にあたる駅の裏手を、二十分ほど上りきった高台に高校はあった。坂道を上るにつれて湾が少しづつ姿を見せてくれるのを、はじめの二、三日こそ振り返っては見ていたが、すぐに飽きて前を行く友人たちの背をひたすらに追って上るという毎日であった。近隣の町々からその街に多くの高校生や大学生が通っており、同級生の中には、外海に突き出ている半島の半ばほどまでに伸びているローカル線からの通学生もいた。私は本線で五十分ばかりの半農半漁の町から通っていた。

三つ先の駅から乗車していたあの先輩のことを最初に気にしたのは、僕らがみんな中学生になってからは手提げ鞄で通学していたのに、その先輩は、高校生なのに帆布性の肩掛け鞄を左肩にすーと掛けていたからである。先輩は乗車してくると、いつも黒帯で結わえた柔道着を右の手で肩掛け鞄の帯越しに絡げ、もう片方の手に本を持っていて、すぐにそれに目を落していた。車内はたいてい、私が乗車する駅で満席にはなってはいたが、空いていても決して座らずに立っている姿を、五、六席離れたところから毎朝見上げていた。私の知っている柔道部の先輩たちはといえば、束ねた稽古着を振りまわしたりして、我が物顔で大声でしゃべっている猛者ばかりであったので、学帽を目深にかぶった物静かで端然としたその先輩は、何か変わった人のようにしか見えなかった。しかし、いったいあの先輩はどんな人で、どんな本を読んでいるのだろうか。自分が読書好きであったこともあって、私の好奇心は日に日に膨らんでいった。

その頃の私は、前年の中三の時の担任の増田先生が教えてくれた藤村や犀星や啄木などの抒情詩に魅せられていて、勉強部屋に、それらの詩人たちの中から好きな詩を書き写しては、壁という壁に貼りまくっているというような少年であった。若いまだ独身だった増田先生は、詩人たちの詩や小説の中の恋愛についても語ってくれたが、そうした恋愛は甘美でありながら苦悩にも満ちているようで、私はまだ腰が引けていた。私のしていたことはと言えば、何人かの好きな少女たちに手紙を書いて封をするまでがせいぜいで、それを手渡すこともなければ、ポストに入れることもなかった。机の中にはもう何通もの封書が溜まっていた。

五月に入って、プラタナスがいっせいに若葉を光らせ始めるようになった。
同じクラスの女学生が、通学列車内であの先輩に二言、三言話しかけているのを見た私は、学校に着くとすぐに彼女に聞いた。
「吉村さん、車内で話していた柔道部の先輩のこと、君よく知っているの？」
「あの人？あの人は私の兄よ。北君、何か兄にご用があるなら伝えてあげるわよ」
吉村さんから聞いて、先輩は柔道部の主将で、去年の秋には二年生ながら県の大会で優勝した強者であることを知った。吉村さん一家は、先輩が高校一年の夏休みに、先に単身赴任されていたお父さんの後を追って、東京から移ってきたということも分かった。私の父は若い時、東京で働いていたことがあり、何かあるとそのことを話してくれていたので、只それだけでもう吉村先輩を何か身近な人のように感じ、何とか話しができるようになれないものかと身勝手に思った。都会育ちで、文武両道の、眼鏡をかけた色白の端正な顔つきの先輩に何とかして声をかけてもらえるようになる方法はないものだろうか。
「いつも本を読んでいるのを見かけるのだが、先輩は一体、どんなものを読んでいるのか知っている？」
「知らないわ、そんなこと。なんなら聞いてみてあげようか？兄は私と違って、本好きで成績もいいのよ」
私は慌ててそれを断った。柔道の世界からはとても無理だが、いつも読書をしている世界からなら、自分で近づけるのではなかろうかと思ったからである。
二、三日ぐずぐずしていたが、吉村先輩が読んでいる本を何とかして知ろうと、通学列車に乗り込んできた先輩のすぐ傍にまで私は思い切って近寄って行った。それまでにそんなことなどしたことのなかった私の心臓は激しく脈打った。それでも、先輩が手にしていた本に高校の図書室の蔵書を示すシールが貼ってあり、その本の著者が塩尻公明という名前であることまでは判った。しかし、肝心のその本の題名は、先輩の指に隠れたりして最後まで読み取ることができなかった。
放課後、私は、渡り廊下で連なっている三つの木造校舎の一番手前の一年生の校舎から、一番奥の三年生の校舎のその二階の端にある高校創設以来の古い図書室に行った。図書室は開架式で、入った直ぐ右側に事務室が仕切られていた。
「三年生の吉村先輩が今借り出している塩尻公明の本は、なんという題名か教えてもらえませんか」
尋ねた事務員の長岡さんは、入学してきたばかりの私が、詩人で小説家の伊藤整の著作本を次々と借りに来ていることを見知っていたからであろうか、「本当は良くないことなのよ」と言いながらも手許の整理箱から「貸出カード」を一枚取り出して手渡してくれた。良くないと言ったって、蔵書にはみんな貸出カードはついているのだから見ようと思えば誰でも見れるのにと思ったが、私は黙って受け取った。
渡された貸出カードの一番上の欄には『宗教と人生』（塩尻公明）と

書いてあり、私の目的はすぐに達成できた。題名に続く下の欄には借り出した生徒名とそのクラス名が生徒の自筆で書かれ、その右枠には貸出日と返却日が、記入されていた。七、八番目の一番下の欄に、吉村洋治（３Ａ）の名前があった。貸出日記入枠には、日付印字機でその二、三日前の日付が押されていた。返却日記入枠はもちろん未だ空白である。吉村先輩が今読んでいる本は、間違いなくこれだと確かめた私は、三つ上の欄からは、貸出日、返却日の日付が事務員のペン書きから日付印字機に変っていることに気付き、何か大発見をしたかのような気分になって一人で声を出して笑った。何かあったの？というような顔を覗かせた長岡さんに、いや、なんでもないよと胸の前で手を二、三度横に振ったが、笑いは止まらなかった。

塩尻公明のものを読んだことがなかった私は、「日本人名事典」を書棚から取り出した。

「人格主義的教養主義の哲学者、文学者の系列に入る」というような記載だった。

それまで哲学などとはおおよそ無縁でしかなかった私は、同じ系列の著作品として挙げられていた中に、増田先生から名前を聞いたように思う『三太郎の日記』があったので、書棚を探した。裏表紙の内側に付けてある小袋から取り出した貸出カードに、吉村洋治（１Ａ）の名前があった。それならばと、その続きに挙げられていた『愛と認識の出発』それには私はまったくの無知だったが、書棚から探しだした。やはり、吉村洋治（２Ａ）の名前があった。吉村先輩が一、二年生の内からこれらの本を読んでいたことを知った私は、凄い人だと感心ばかりしていて、その日のもう一つの目的を忘れるところであった。私はそれを思い出し、塩尻公明の著作が並んでいる書棚に戻り、一冊ずつ順に取り出して見ていった。そして、吉村先輩は今読んでいる『宗教と人生』のすぐ前には『人生論』を読んでいたことを貸出カードの返却日から確かめることが出来た。私は、その本を借り出した。

翌日、私は『人生論』を持って、吉村先輩が通学列車に乗って来るのを座席で待っていた。

吉村先輩は、いつものように四号車の中ほどに入ってくると、あの『宗教と人生』に目を通し始めた。私は、すぐ傍にまですーっと近寄って行って『人生論』を開いた。そのような行為をするのが二回目だったからであろうか、不思議なほどに私の心臓は落ち着いていた。

列車が急カーブに差しかかり大きく揺れた拍子に、吉村先輩は私が隣りで『人生論』を読んでいたことに案の定気づき、私の詰襟の１Ａの徽章をちらっと見て、

「君、塩尻公明が好きなのか。その『人生論』は先週僕も読んだばかりだよ。塩尻のものでは他ににどんなものを読んでいるの？一年生になったばかりと思うが、もうこんなのを読んでいるのか。君、名前は？柔道は、やってはいないな」と矢継ぎばやに私に聞いてきた。物静かな人だとばかり思っていたので、歯切れのよい問いかけに少しばかりたじろいたが、少しでも良い印象を持ってもらえるようにと、前日の夜から決めていた通りに答えた。

「妹さんと同じクラスの北です。先輩が、塩尻公明のものを読んでおられたので、どんなものなのかと思って、読み始めたばかりです」

「君は柔道はやっておらんようだが、放課後に練習を見に来ないか。その後一緒に帰ろう。豚まんくらいは奢ってやるよ」
私は、自分の計画がみごとに的中して吉村先輩から声をかけてもらえたという事で、本当にそういう表現を安易に使ってよければまさに舞い上がっていた。
僕は、もういつでも通学列車の同じ車両に乗って吉村先輩と話しができるのだ。次に吉村先輩と話す時までに、吉村先輩のことをもっと調べて、先輩のことは何でも知ってますよ、と言って驚かそう。そうだ、先輩がこれまでに読んでいる本は、僕はみな知っていますよと言って驚かそう、そうしよう、と自分で自分に言い聞かせていた。
私は友人に肩を叩かれて、みんなが列車を降りはじめていることにようやく気がついたほどだった。

一年前に同じ街の短大を卒業して、母校であるこの高校に事務員として採用されていた図書室の長岡さんの顔がすぐに浮かんだ。長岡さんのことは、クラスで机を並べていた彼女の弟の長岡君が、何かの時に私に言ったのでそのくらいのことは知っていた。
「日活の文芸映画に出ている僕の好きな芦川いずみに似ている長岡さん、長岡さんが、僕より六歳上の二十二歳であることを知っていますよ」と、その好きな横顔を盗み見するたびに密かに口にしていた長岡さんに、私は頼むことにしたのだ。
長岡さんは、「北君はどうしてそんなことを調べるの?」と聞いてきた。
「吉村先輩が読んだ本を、できたら先輩が読んでいった順に読んでみたいのです。でもこのことは、吉村先輩には絶対内緒ですよ」と答えた。
「君はよっぽど吉村君が好きなのね」
微笑みながら「わかったわ」と長岡さんは約束してくれた。
長岡さんの調べができ上がるまでというもの、私は通学列車内でも吉村先輩には近づかなかった。ある日突然ビックリさせたい、驚きの声を聞きたいという少年のような思いに浸っていた。
それから一週間経ったか経たない内に、長岡さんから連絡があった。
渡されたリストには、予想していた通り私のまだ読んでいない分野の本ばかりが並んでいた。そうか、これらの本を読めば吉村先輩のような大人になれるのか。でも、吉村先輩はどうして伊藤整や藤村や啄木や犀星を読んでいないのだろうか、疑問がちらっと浮かんだが、それ以上詮索するのは何か悪いような気がして止めて、もらったリストを自分用にもう一枚書き写した。

ちょうどその翌日だったはずだ。
「北君、今度の日曜日に遊びに来ないかって、兄が言ってるわよ。君は兄に一度声をかけて、そのままというじゃない。何か行き違いでもあったのではなかろかと、兄が心配してたわよ。」
「行きます、行きます。いきますって先輩に伝えてくれる?」
「日曜日には、私も家にいるつもりよ。借りているのは二階建ての洋館だからすぐ分かると思うわ」と言って、手書きの地図を渡してくれた。
訪ねて行った吉村先輩の家は、その地方都市の昔の中心地であった

ことを色濃く残す武家屋敷通りに面した、ちょっと奥まった二階建ての古い洋館だった。吉村さんの言ったとおりだった。なまこ壁の続く屋敷町に不思議に溶け込んでいたのは、二階建ての洋館のくせに何か遠慮したように門が一間も引っ込んでいて、その門も日本式であったせいであろうと私には思えた。

呼び鈴に出て来た吉村さんは、

「兄は散歩に出かけておりますが、すぐに戻ってまいりますので、私の部屋でお待ちになりません？」大人びた言い方をした後で、すぐに笑って、いつもの吉村さんに戻った。

私は誘われるままに、二階について上がった。ここが兄の部屋よ、吉村さんは通路の右の部屋を指差しながらそのまま突き当りまで進み、ドアーを開けて私の背中を押した。女の子の部屋に入るのは、まだ小学四年生で男か女かわからない妹の部屋ぐらいでしかなかったので、私は吉村さんの部屋全体が何か桃色をしているように感じられて、すぐに息苦しくなってしまった。

「下で待ってることにするよ」と言いながら、私は吉村さんが閉めていたドアーを開けて、階段を逃げるかのようにして降りていった。

「北君って、初心なのね」と階段の手摺りから身を乗り出すようにして、吉村さんは笑って私を揶揄った

。

「ただいま、お客さんはまだかな？」吉村先輩だった。

私はようやく自分を取り戻したが、二階の先輩の部屋に招き入れられ、机の上にあった希臘彫刻の若い男女の絡み合ったブロンズの裸体像を目にすると、またすぐに落ち着きを失くしてしまった。

「これは僕のお気に入りのもので誰にも触らせないのだ。妹にもだよ。北君、持ってごらんよ。ずっしりとした重みがたまらないから」

誰にもと言ったのに、僕に触らせてくれているのは、僕が好かれているからなのだろうか、私は頬を真っ赤にして抱くようにして持ち続け、「もう、いいかな？」の声にやっと気づき、慌てて先輩の手に戻した。

吉村先輩はその像を机上で、自分の好みの向きに据え終えると、壁に貼っている二枚の大仏の写真を指差した。

「僕は今、奈良の大仏様と鎌倉の大仏様の表情の比較を、自分なりにしているんだ。ほら、鎌倉は下目使いで、奈良は上目だろう」と説明し始めたが、私はその先輩の顔をうっとりと見ていて、それから先のことはよく覚えていないというていたらくであった。

そのうちに、吉村さんがコーヒーを持って来てくれたこと、その吉村さんがえらく短いふりふりのついたスカートに着替えていて、人形みたいだなと思ったことは覚えている。しかし、あんなに吉村先輩に憬れて尋ねて行ったというのに、私を揶揄った吉村さんのことばかりを鮮明に覚えているのは一体どうしてなのだろうか。そうだ、憧れている人のことは覚えられないものなのだ、私は奇妙な理屈をつけて自分を納得させるしかなかった。

それはともかく、せっかく調べて持って行った吉村先輩の読書歴のことを私は話したのだろうか。その時、先輩はどんな表情をして、どんなふうに驚いてくれたのであろうか。その瞬間を楽しみにしていたと言うのに、思いだそうとしても思いだされなかった。後年になって、酒を飲んでどこからかスポッと記憶が無くなった時のようなそんな感

じだった。

翌日、教室で吉村さんが言った。

「北君って、素直で頭のいい子だねって、兄が褒めてたわよ。自分でも忘れてた読書歴がわかって、もう一度読み直したい本も出てきたと感謝してたわ」

前の日に帰宅してからというもの、肝心なことを思い出せない自分の不甲斐なさに落ち込んでいた私は、吉村先輩が私を

「素直な頭のいい子だ」と言っていたと聞くと、その落ち込みからすぐに抜け出した。

「そうなの？」と私は口では相槌を打ちながら、心中では先輩の言葉を何度も繰り返して何とも言えない幸せな気分に浸っていた。一番心配していた先輩の読書歴のメモが、間違いなく先輩に渡っていたことが分かったと言うのに、そのことはもうどうでも良いほどだった。

「君ともっといろいろ話しをしたいと兄が言ってるわよ。来週も遊びに来ない？待っているわ。兄だけでなく、わ、た、し、もよ」吉村さんはわたしのところを一語ずつ切って言って、私を正視した。

二度目に、吉村先輩の家を尋ねたのはそれから二週間のちだった。私は、前ほどではなかったが、それでも今はもう、断片的な事しか思いだせない。

「先輩が一年の時に読んでおられる『古寺巡礼』を、僕も先週から読んでいます。先輩と一緒に古都を巡礼できたら最高ですが、無理でしょうね」と誘った。

「今年の夏休みは受験勉強もあるしな。僕は大学生になったら、そうしたいと思っているので来年はどう？」と言ってくれた。それが嬉しくて、私は、もう、二人の旅行を頭の中で思い巡らしていた。

先輩の博識ぶりを聞くのが嬉しくてたまらなかった。その日、何かの話しの中で、先輩が本棚から一冊を引きだして「読んでみたらどう？よかったらあげるよ」と手渡してくれた。『ドレフュス事件とエミールゾラ』という私の全然知らない本だったが、今も私の本棚に残っている。

その日のことも、もうこのくらいしか思い出せない。ただ、その日には吉村さんは浴衣を着ていて、私をからかうような素振りは一度もみせず、大人の女性のようだったことを覚えている。

吉村さんは、駅まで送って行くといって、日傘を差して、私に入るように促した。私は途中まで黙って順っていたが、次第に動悸が激しくなり日傘から出た。そんな私の挙動を、同級性なのに女の吉村さんにみんな見透かされているようで恥ずかしかったことを覚えている。

それ以来、吉村さんは僕の心の隅に何時も居たが、僕が吉村先輩を敬慕するのを邪魔するものでは無かった。

毎朝の通学列車の中での話しや、三年生の教室に先輩を尋ねって行ったりしているうちに、私の吉村先輩を敬慕する気持ちは息苦しいほどにどんどん膨れあがっていった。「吉村先輩もきっと僕を好きに違いない」私は自分に言い聞かせてはうっとりとしていた。

そのころだった。

昼休みに校内の売店で、級友の長岡君が吉村先輩と親しそうに話し

ているのを見かけた。私はそれが気になって仕方がなく、教室に戻って来た彼に

「長岡君、君、吉村先輩を知っているの？何を話していたの？」と、問い詰めるように言ってしまった。

長岡君は「姉さんの使い走りで、吉村先輩が探していた本が見つかったということを伝えただけだよ」

「君、ちょくちょくそんなことをしているの？」

何でもないことなのに、吉村先輩と親しくしている同級生がいることに私は妙に苛立った。

吉村先輩が、柔道場での練習を見に来ないかと言っていたのを思い出して、夏休みが間近になった土曜日の昼下がり、私は体育館に足を向けた。体育館は、段々畑のように連なっている校舎の一番奥の三年生の棟、あの図書室のある棟の、その後ろの森を切り開いて造成した一段高い台地に、五年ほど前に建てられたばかりで、アーチ状の屋根が際だって目立つ外観をしていた。入り口の脇に屋上に繋がる螺旋階段があった。

見学通路の直ぐ近くで、先輩が組みあっているのが見えた

二人はすっくと立って、それぞれが左手で相手の衿を持ち、右手で袖口を引きあって少しずつ廻っていた。

突然、吉村先輩の、はだけた柔道着の中の真っ白い胸が、私の眼に飛び込んできた。

私は最初、それが何か判らなかった。柔道着のどこか一部に真っ白い生地があって、それが目に入ったのかと思った。

しかし、すぐに、それは吉村先輩のはだけた胸であることに気づかされた。柔道着は、相手に握られて右に左に動いているのに、その真っ白い胸は真っ白いままだった。

吉村先輩の唸るような声がすると、相手の体が後ろに崩れ、先輩もそのまま上に重なって倒れこんだ。先輩が相手の手を取って立ち上げた後、二人は柔道着をきちんと正して、相互に一礼して別れた。

もう白い胸は柔道着の中に隠されてしまっていたが、あの胸の真っ白い肌はまだ私の目に焼きついたままだった。

僕は、見てはならないものを見たのではないだろうか。

だったら、このことは誰にも言ってはならない。自分だけの秘密にしておかねばならない。先輩と親しそうに口をきいていた長岡君には、死んでも教えないぞ。私は棒立ちのままで、何度も自問自答していた。

しばらくしてやっと、我に返り体育館の奥から離れることができた。私は、何ものかに誘われたかのように、そのまま入り口の脇の螺旋階段を上って行って、屋上に立った。

螺旋階段を周るたびに見えていた入道雲が全容を表した。遥かな水平線上に、まるで海の底から仁王立ちしているかのような大きな入道雲だった。

入道雲海の底から仁王立ち

昼下がりの真夏の陽を受けて、その大きな入道雲は真っ白く輝いていた。目映いばかりに白く輝きながら未だもくもくと伸び上がってい

た。
しかし私の心に浸み込んでいる吉村先輩のあの胸の白さは、あの入道雲の輝くばかりの真っ白さを、それを遥かに上回る正真正銘の真っ白だった。
私は、屋上でいつの間にか「僕だけの真っ白い胸だ」と繰り返し叫んでいた。

その夜、勉強部屋で布団に入った私は、吉村先輩のあのはだけた白い胸を思いだしていた。あの真っ白い、入道雲より真っ白い先輩の胸に、自分の顔を埋めてみたい。そして優しい声をかけてもらいたい。私はいつの間にか、俯せになっていた。
私の下半身に、もうそのころには何度か経験のあった甘美な衝撃が走った。その衝撃の萎えるまで、私はじっとしていた。
やがて、私はしてはならないことをしてしまった自分に気づいた。
どうして、僕はこんなことを吉村先輩にしたのだろうか。女でもない男の吉村先輩に僕は何ということをしたのだろうか。
それまでに何度かあった、事務員の長岡さんや吉村さんの顔を思い浮かべながらの行為では、その後、自分をそんなに責めることはしなかったのに。「今度は違う、違う」「僕は異常な男なのだろうか。そうだ、異常な男になってしまったのだ」
眠れない夜だった。

週が明けて、下校の列車をホームで待っていた私に、吉村先輩は、「この前、稽古を見に来ていたようだったが、途中で帰ったのかい？どうして待ってくれなかったのだい」と声をかけてきた。私は、眩しい目で吉村先輩を見上げたままで声が出なかった。
「いつでもいいから、また見においでよ」吉村先輩は、先週までとは違う新しい本に目を戻して、入線してきた列車に乗り込んだ。私も付いて同じ車両口から乗ったが、中に入るとすぐに、隣の車両に移った。一緒の車両に乗ってはいけないような気がしたのである。

二、三日後だったか、吉村さんが声をかけて来た。
「北君、もうすぐ夏休みに入るわよね。最初の日曜日に遊びに来ない？兄のガールフレンドも来るのよ。岬をぐるーっと廻ってその先で錨を下ろして、泳いだり、潜ったりして、食事をするの。兄は船を漕ぐのもうまいのよ。弁当は私たち女性が作ってゆくから、北君は海水パンツだけ持ってきてね。いいでしょ」と言って、私の顔を覗きこみ「私の水着姿も見せてあげるわよ。兄たちは兄たちで、私たちは私たちでね」と続けた。しかし、私はすぐに「その日は家族で約束があるから」と口から出まかせを言った。そう言いながら、私は、吉村さんの胸の部分が盛り上がっている水着姿を思い浮かべていた。

夏休みに入って、私は、吉村さんの言っていた先輩のガールフレンドのことがずっと気になっていた。
吉村さんたちが舟遊びをしているはずの日曜日に、私は登校して図書室に行った。夏休みになっても、図書室は生徒に解放されていたのである。
私の目当ては、列車の中で吉村先輩に近づく時に持って行ったあの

塩尻公明の『人生論』だった。いやその『人生論』の裏表紙の内側に付いている小袋の中の「貸出カード」であった。私は指を震わしながらそのカードを抜きだした。カードの借り出し者の欄の一番下に、自分で書いた「北洋一（１Ａ）」がある。私は、指を上にあげた。すぐその上の欄に「吉村洋治（３Ａ）」がある。さらに上に指を一欄ずつ上げていった。

あった。五つ上の欄に、「長岡啓子（２Ｃ）」があった。

塩尻公明の、『宗教と人生』それをまだ私は借り出していなかったので、借り出し者欄には、私の名前は無く一番下の欄に、「吉村洋治（３Ａ）」があり、その四つ上の欄に「長岡啓子（３Ｃ）」があった。『三太郎の日記』にも、『愛と認識の出発』にも、『古寺巡礼』にも、「長岡啓子」の名前が「吉村洋治」の名前の幾つか上の欄にあった。

補習授業で登校した私は、来ていた吉村さんと顔を合わせた。

「北君、君が来ていたらもっと盛り上がっていたのに。私、兄たちの余計ものみたいになってしまって、君のことを恨んだわよ」

「ごめんごめん。それで思いきって聞くんだけど、吉村先輩のガールフレンドって、もしかしたら長岡さんではない？」

「あら、どうして知ってるの。私この前、君に言ったかしら？言ってないわよね」

吉村さんが言うには、吉村先輩が転校してきた一年生の二学期に、短大生であった長岡さんが、司書の実習で母校に来ていて、それ以来の友達だということであった。

私が頼んだ吉村先輩の読んだ本のリストをあんなに早く長岡さんが作ってくれた理由もわかった。長岡さんは、吉村先輩に自分の読んだ本を教え、それを吉村先輩は読んでいたのだ。前の日曜日、図書室に調べに行ったあの日に、別の事務員がいて、長岡さんがいなかったので、私にはもう判っていたのである。

その後の私は、柔道の練習場に足を向けることもなかったし、吉村先輩と同じ車両に乗ることもなかった。ただ、吉村先輩が読んでいた本をできるだけ早く全部読み終わろうとしていた。文武両道の吉村先輩にせめて文だけは追いつきたい、負けたくないという競争心が、どこからか私に生まれていた。「先輩が読んでいた本を読み終えたら、僕が読んでいる伊藤整や啄木や藤村を吉村先輩は読んでいないから僕の勝ちだ」と言って、自分を奮い立たせていた。

しかし、あんなに憧れていた吉村先輩をみずから失い、長岡さんにも気安く声をかけられなくなってしまった苦い思いは、私から長く消えなかった。入道雲を平気で眺められるようになるまでにも時間が必要だった。七十歳を越えて俳句作りを始めるようになって、ようやく入道雲ときちんと向かい合えるようになった気がする。五十年が必要だったことになる。

冬が終わり切らないうちに卒業が来て、吉村先輩は中央の大学に去って行った。吉村さんはその後も、何かあると私に言った。

「北君、兄はちょくちょく君のことを私に聞いていたのよ。せっかく知り合いになれたのに、どうしたのだろうか、ってね」

（2025.9.11）